

念仏は人間に何を与えるのか——親鸞を通して考える——

大谷大学教授 一 楽 真

はじめに

こんにちは。紹介にあずかりました一楽でございます。

昨年予定されておりました、この春季講演会が一年延びまして、今年もどうなるだろうと思っておりましたが、先ほど学長のお話にもあった通り、五木寛之先生がこちらに来てくださるということで、何とか実現ということになりました。

私は、去年出した講題をそのまま今年もかかげさせていただきました。

新型コロナウイルスが感染拡大する中、あちらこちらで訊かれたことの一つに「仏教は、この現実問題にどう応えるのか」ということがありました。これは、この病気をどうにかしてくれないかということに期待する声である

わけです。しかしながら、それだけではなくて、こういう問題に仏教はどう応答するのかという問いでもあります。そんな中で、法然上人（一一三三～一二二二）、親鸞聖人（一一七三～一二六二）が本当に大事になさった「南無阿弥陀仏」、念仏申すという教えが、昨今、甚だわかりにくくなっているということをあわせまして、私なりに、念仏申すとはどういうことなのか、「南無阿弥陀仏」は人間に何を与えるのかということを考えたいと思って、今日の講題を出させていただいたことであります。

口に「南無阿弥陀仏」を称しても何もならない。こういう批判すらお寄せいただくことであります。そんな中で、親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」をどう考えていたのか。これを改めて尋ねてみたいという趣旨であります。一枚、簡単な資料をお届けさせていただきました。それに沿いながら話を進めていきたいと思っております。

一 仏との出遇い

まず「仏ぶつとの出遇であい」と書きました。これはどういうことかと言いますと、念仏というのは「仏ぶつを念おもう」「仏を念ずる」という字を書きますが、果たして仏を知っているのかという問題なのです。仏を知らずに仏を念うことはできないわけです。ところがよくよく考えてみますと、「南無阿弥陀仏」と称えることもそうですが、仏に遇ったこともないにもかかわらず、私は仏を念じていますとか、仏を信じていますということをおっしゃる方があります。それはどういう仏を信じておられるのか。どういう仏を念じておられるのか。そこを確かめないとそもそも念仏ということ自体が成り立たないということを親鸞が教えてくれていると思います。

ですから結論的なことを言ってしまうと、口で「南無阿弥陀仏」という発音をすれば念仏だという話ではないということです。そこに念おもわれている仏は、本当の仏なのかということがあります。これが念仏の前提にあると

いうことであります。

阿難に起こった出遇い

一つの例として、お釈迦様の弟子でありました阿難あなん（アーナンダ）のことをご紹介したいと思います。

響流館きやうりゅうかんに入っていたいたところに、本校の卒業生でもあります畠中光享先生の絵が掛けられています。ゴータマ・ブッダがお歩きになっている絵で、ブッダの後を歩いているのが阿難であります。いつもお釈迦様に随つて旅のお供をしていたという方であります。旅のお供をしていますので、お釈迦様がお話をされる時にはいつも隣にいるわけです。ですから、阿難は一番お釈迦様の説法を聞いた人として「多聞第一（多く聞くこと右に出るものはない）」の弟子というふうに言われていました。

ところが阿難は、お釈迦様のお心になかなか気づけないのです。どういふことかと言うと、お釈迦様があまりにも立派でしたので、阿難は、自分は到底及ばないと思っていたわけです。

お釈迦様は、誰もが迷いを超えて生き生きと生きる道、これを説こうとしています。人間が迷い苦しむのには法則がある。それを超えていくにも法則がある、その法則を見出されて説いておられたのがお釈迦様なのです。ですから、お釈迦様は個人的な能力で覚ったとか、経歴がすごいとか、そういう話では全くないわけであります。

にもかかわらず阿難は、お覺りを開くなんていうのは自分には夢のまた夢だ、到底及ばない、仏陀になんかなれるはずはない、こういうことをずっと思っていたのです。ですから、お釈迦様がいくら「あなたも仏になるんだよ」と呼びかけてくださっても、私は無理だと思っていたわけであります。これは、人間的には謙虚かもしれませんが「俺も仏になるんだ」と言うよりは、「私なんか到底無理です」と言うほうが謙虚な話かもしれません。しかしそれ

は、お釈迦様からすれば、「ああ、阿難にはまだ通じないか。まだわかってもらえないか」という思いをずっと抱えておられたと言えます。

そのような阿難が改めてお釈迦様に出会い直し、その本当のお心に気がついたということを書いているのが、『仏説無量寿經』（親鸞は『大無量寿經』と呼びます）です。親鸞が『教行信証』の「教巻」に引いているところを、ここに挙げさせていただきました。

大聖、我が心に念言すらく「今日、世尊、奇特の法に住したまえり。今日、世雄、仏の所住に住したまえり。今日、世眼、導師の行に住したまえり。今日、世英、最勝の道に住したまえり。今日、天尊、如来の徳を行じたまえり。去来現の仏、仏と仏と相念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何が故ぞ威神の光、光いまし爾る」と。(中略) 仏の言わく「善い哉、阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。」

〔教巻〕所引『大無量寿經』、『真宗聖典』一五三頁、傍線引用者
「大聖」はお釈迦様のことで、これは阿難がしゃべっているのです。「今日」ということですが、「今日のお釈迦様はいつもと違いますね」ということを五回繰り返しています。「今日」が五回出てきます。今までは違う見方でお釈迦様を仰ぎ直したということです。それをまとめると、傍線部分の「去来現の仏、仏と仏と相念じたまえり」ということになります。「去」は過去、「来」は未来、「現」は現在です。過去・未来・現在の仏様というのは、お互いに念じあっておられるのですね、ということです。

そして「今の仏」、これは目の前のお釈迦様のことですが、「お釈迦さまもたくさんの仏を念じておられたのです

ね」というふうに言ったのです。これは何気ない言葉ですが、今まで阿難はお釈迦様をどう見ていたかと言ったら、お一人の素晴らしいお方として、仏陀は上のようにおられると思っていたのです。しかしそのお釈迦様は、実はあの方も仏になる、この方も仏になる、昔にも仏はおられた、今現在もほかの世界に仏はおいになると、そのたかさんの仏を念じているお方だったわけであります。

特に過去の仏様、これは大乘仏教が非常に大事にします。お釈迦様から仏教が始まったというのではなくて、お釈迦様の前にもたかさんの目覚めた方がおられたという過去の仏という思想が出てきます。それから現在も、他方仏というかたちで、インドだけでなくてほかの世界にもたかさんの仏がいらっしゃるということも言います。未来の仏と言うと、有名などころでは弥勒菩薩が今修行中であります、五十六億七千万年の後にお釈迦様の次にこの世にあらわれて仏になってくださるという思想もあります。

ただそれだけでなく、お釈迦様は目の前にいる阿難も必ず未来に仏になる存在だとかご覧になっているわけです。阿難は、自分は能力が足りない、ぜんぜんダメだと思っています。しかしお釈迦様は、「あなたも仏になる存在なのですよ」とご覧になっている。つまり、迷っている人間もただ迷っているというふうにご覧にならないのがお釈迦様なのです。必ず迷い苦しみ傷つけあうことを超えて、仏として人生を完結していく。こういうことを念じておられたのがお釈迦様なのです。

ですから阿難は、自分が完全に勘違いをしていたということに気がつくわけです。お釈迦様の位置までのぼるのに、どれだけかかるのかわからない。どんな修行をしなければならぬのかわからない。到底自分には無理だと思っていた。この思いが碎けたのが、仏との出遇いであります。

自分の思い計らっていたこと、自分が予定していたこと、自分の考えで固めていたこと、もうちょっと言えば思

い込み・決めつけ、これが碎かれるというかたちで起こるのが「仏との出遇い」の中身であります。これまでも阿難はお釈迦様の顔を見ていましたし、何遍もお話を聞いていましたが、本当の意味で仏とは出遇っていないかったです。改めて出遇い直した、これがこの物語です。

お釈迦様はそれを聞きまして「あなたの問うたところはとつても大事だ」と言つて自分の一番の願いを語る。それが次の傍線部分「如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり」です。「我」と言つてもいいのですが、ここは「如来」と言つています。つまり、お釈迦様お一人でなくて、「ありとあらゆる如来は迷い苦しむ衆生を救うためにこの世にあらわれたのですよ」ということを言っています。この世の中に出てきた理由は、仏道（仏教の教え）を開きあらわして群萌を救い、恵むために真実の利を以てせんとおもうからであると言っています。

これは順序が大事です。阿難が気づいていない時にお釈迦様が、たとえば「今日は誰もが仏になる法を説くぞ。誰もが仏陀になる道を説くぞ」と言つたとしましょう。でも阿難は、私なんかは無理だと思つていますから、遠慮をするわけです。お釈迦様が言つたことですら聞かないわけです。それぐらい自分の中にある思い込みがきついわけです。なかなか厄介です。ですから仏と出遇う、ここに仏教は始まると言わなければなりません。逆に言えば、本当の出遇いがなければ、全部思い描いたものにすぎません。「仏さんとはこんなお方だ」「こんな救いをくれるに違いない」全部思い込みです。これが碎けるのです。如来出世の大事（本懐、正意）を知つた阿難、これが仏教のスタートだと言わなければならないと私は思います。

親鸞はこれを『教行信証』の冒頭のところに引用するわけです。これがないところには、たとえば仏教用語をいくら駆使していても、それは仏教と関係がないということなのです。仏教的な装いをもつて語つていても、それは

迷い傷つけあうことを超える道とは無関係ということです。

出遇いの難しさ

もう一つの言葉を読みます。これは同じ「教巻」に引かれる『平等覚経』のお言葉であります。

『平等覚経』に言わく、仏、阿難に告げたまわく、「世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし、天下に仏まします、いまし華の出ずるがごとしならくのみ。世間に仏ましますも、はなはだ値うことを得ること難し。」

〔「教巻」所引『平等覚経』、『真宗聖典』一五四頁、傍線引用者〕

「優曇鉢樹」というのは三千年に一度咲くと言われる優曇華の花、極めて見ることが難しいお花、遇うことができないお花であります。それをたとえに出しまして、仏に遇うというのはそれぐらい難しいということを言っています。

傍線部分「世間に仏ましますも、はなはだ値うことを得ること難し」、これは、お釈迦様がお出ましになった時代（今から二千五百年前のインド）にたまたま巡り合わせなかったから、仏と出遇い難いという意味ではありません。お釈迦様がおられても遇えないということがある、これを言っている言葉なのです。

仏に出遇えないと、背くことすら起ります。その例として「提婆達多」の名前を挙げました。この方お一人ではありませんが、仏陀に背いた方としてたいへん有名であります。先ほどの阿難のお兄さんとして伝える文献もあります。ですから兄弟でも違うのです。弟の阿難は遇えました。お兄さんの提婆達多は遇えずじまい。そういうことがあるのです。

これはたいへん大事です。お釈迦様がいても仏に遇えないということがある。二千五百年前のインドに生まれれば仏教がわかったのという、そんな話ではないということです。二千五百年前のインドに生まれても、仏教に遇えずじまいということがあるのです。

私は授業後、学生さん達にどんなふうに伝わったか確認するために感想文を書いてもらっていますが、この話をさせてもらった時の感想文に、「お釈迦様も百発百中ではなかったのですね」と書いてありました。なるほどと思いました。でも、そうなのです。お釈迦様に出遇った人全員が、お釈迦様のお心をわかったわけではないのです。背く人も出た。そういうこともあるのです。縁が整うということはそれくらい難しいのです。

お釈迦様が、たとえば人の心の手を突っ込んで悩みを抜くのならば、お釈迦様が救い主です。でもそうではないのです。本人が目覚めていく、その後押しをする。そのためにいろいろな言葉をメッセージとして届けてくださる。これが、お釈迦様ができるところなのです。その言葉を手がかりに目覚めるかどうかは、厳しい言い方ですけども、一人ひとりの責任なのです。これを阿難と提婆達多という兄弟がよくわかる違うかたちで見せてくれた。これは、私はいへん大きいことだと思います。

二 阿弥陀仏との出遇い

「仏との出遇い」が仏教の出発点だと申しあげましたが、お釈迦様はこのことを明確になさる中で、「阿弥陀」という名前を大事になさいます。

インドのもともとの仏教に詳しい方は、「阿弥陀なんていうのは後から出てきた教えだ」ということをおっしゃいます。「ほかから流入してきた他宗教の影響もあった」ということもおっしゃいます。そういうことも、もちろん

私は否定するつもりはありません。

ただ、お釈迦様の一番言いたかったことは何かと言ったら、お釈迦様一人が偉い方ではないということです。誰もが仏になる法則・道筋を説いてくださっている方でありますから、「それに出遇いなさい」ということを勧めてくださるのがお釈迦様なのです。お釈迦様は、「阿弥陀に出遇え」という教えを残されたわけです。なぜかと言ったら、お釈迦様に遇ったからといって迷いを超えられないからです。お釈迦様の顔を見て救われるのであれば、「私のところに来い」「私に出遇え」と言うのですが、そんなことは言わなかった。「阿弥陀に出遇え」というふうにおっしゃる。

「阿弥陀」というのはインドの発音を漢字に写していますが、意味は「無量寿（分量で量れない寿）」と訳されます。「無量光（分量で量れない光）」とも書きます。

我々は日頃いつも分量で量っています。勝ったか負けたか。得か損か。ひどい場合には生きている価値があるかないか。ここまで量っています。しかしお釈迦様が見せてくださった世界は、どんな命も誰とも代われない、どんな命にも尊さがある世界です。これをインドの言葉では「阿弥陀」というわけであります。

阿難がお釈迦様に出遇ったということと同じことが、時代を超えて、国が違って、誰の上にも起こるということを残してくださった。これが、「阿弥陀に出遇う」ことを残されたお釈迦様の教えであります。

「阿弥陀」の名を勧める釈尊

次に二つ、お経の言葉を挙げさせていただきました。一つは、先ほどの『大無量寿経』の最後の部分（流通分）です。説いた教えが未来に伝わっていくように、広く世界に届いていくように、流通していくようにという願いを

もって説かれている部分です。

仏、弥勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念することあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。則ちこれ無上の功德を具足するなり。」

〔大無量寿經〕流通分、〔真宗聖典〕八六頁、傍線引用者

初めの「仏」というのはお釈迦様です。釈尊が、自分の次にこの世の迷い苦しむ衆生を救う、大乘仏教で大事な役割を担う弥勒菩薩に対して、次のようにおっしゃったということです。

傍線部分「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念することあらん」です。阿弥陀のお名前を聞くことを得て、そこに歓びを持つて、たった一遍でも念仏することがあつたと言っています。「乃至」というのは十乃至二十とか百乃至二百というふうに間をとる時に言います。一から五なら一乃至五です。ですからここでは、たった一遍でもということです。たった一遍でも阿弥陀を念ずることがあるならば、その人は大きな利益を得る。「無上の功德」を具^{そな}えるというわけです。

おもしろいのは、未来の衆生の救いを担う弥勒に対して「あなたは自分勝手にやりなさい」とは言わないところです。「大事なのはここですよ」「要はここにありますよ」ということを「阿弥陀の名前を聞きなさい」という言葉で残していかれた。私どもからすると、釈尊の遺言のように聞こえてまいります。お釈迦様が大事にしておられる世界を「阿弥陀」の名前を通していただいています。

「阿弥陀」とは、物差しで量れない世界、これを私たちに伝えるための言葉であります。日頃、良い悪い、勝った負けたにこだわっている私たちに対して、「そんな物差しでは量れない世界があることを忘れてはいないか？」と呼びかけてくる。それが阿弥陀の名前、言葉の持っている力であります。

今日は隠れておりますが、この演台正面には、親鸞聖人が大事にした「歸命盡十方無碍光如來」という「南無阿彌陀仏」の意味を十字の言葉であらわしたご本尊が彫られてあります。そのもとは、こういうお経にあるのです。

「名号を聞く」、名前を聞くという、ここが大事なのですが、聞くとなるとまたいろいろな詮索がおきます。本当に聞いているのかどうか。お経をたくさん読んだ人のほうが聞く度合いが深いのではないか。こういうことが出てきます。私たちは比べるという根性が抜けないものですから、阿弥陀の話を聞いても、阿弥陀の世界に触れても、また比べ合う。そういう私たちに對して、あえて「聞く」という言葉を奥に引っ込めて、「名前を称えるだけで良い」と勧めたのが、この『大無量寿經』を受けた『觀無量寿經』のお言葉であります。

『觀無量寿經』では人間の在り方を九通りに分けまして、この人にはこういう道があり、この人にはこういう道があるといういろいろな道筋を示してくださいます。世間ではいろいろな生き方の違いがあります。善を積み上げてこられた人もある。社会的にもすごく業績を上げてこられた方もある。そういう縁がなくて一生懸命生きようと思っても傷つけ合うことばかりしてきたという生き方もある。でも大事なのは、「誰の上にも、阿弥陀と出遇いさえすれば道は開ける」と言っているということです。九通りの在り方を挙げて、そこから阿弥陀との出遇いによってその人に道は開けるのだということを言う。それが『觀無量寿經』の九通りの人の在り方を勧める大事さであります。これを「九品くほん」と言います。

お経が人間をランクづけしているように見えますが、一言で言うなら「誰もが平等に救われますよ」と言えはいわけです。ですが「誰もが平等に救われますよ」と聞いても、「いや、あんな立派なことをしてきた人と私とは違うでしょう」とか、「あれだけ仏教に詳しい人とお経を読んだこともない人とは違うでしょう」と、こういうことになります。そのような意見に對して、この人にはこういう道があり、この人にはこういう道があると、いちいち具

体例を挙げてくださるのがこの九通りの人の生き方なのです。大事なものは、どこにでも阿弥陀との出遇いがあるということ。阿弥陀との出遇いによって道が開かれるわけです。ですから、一言「みんな助かるよ」と言ってもうなずかない人間を見越して、こういうランクづけがあるような価値観の上で説いているわけがあります。

次に引きましたのは、その九通りの在り方の最後に位置づけられています。一番上は「上品」、そして「中品」、「下品」とあります。そして、それぞれに上・中・下がありまして、合計で九通りになるわけですが、次に挙げましたのは最後に出てきます「下品下生」といわれるところです。これは、今までに善を作すような縁に遇わなかった人であります。

仏、阿難および韋提希に告げたまわく、「下品下生というは、あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十悪を作る。もろもろの不善を具せるかくのごときの愚人、悪業を以ての故に惡道に墮すべし。多劫を経歴して、苦を受けること窮まりなからん。かくのごときの愚人、命終の時に臨みて、善知識の、種種に安慰して、ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。この人、苦に逼められて念仏するに違あらず。善友告げて言わく、「汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」と。かくのごとく心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に、念念の中において八十億劫の生死の罪を除く。」

〔『観無量寿經』下品下生段、『真宗聖典』一二〇—一頁、傍線引用者〕

初めの「仏」はお釈迦様であります。そのお釈迦様が、阿難と『観無量寿經』の直接の対告衆である韋提希に対してお告げになりました。

「不善業」とは、わかりやすく言えば悪です。傷つけ合うような生き方をしてきた。不善業の第一番目、殺生をするなどという戒めを破って殺生をして生きてきた。嘘をつくなど言われても嘘をついて生きてきた。そういう人間閑

係を壊していくような在り方(十悪)を作ってきたわけです。ただ、この人は不真面目でそうなったと言っているのではないのです。

「もろもろの不善を具せるかくのごときの愚人^{ぐにん}」と書いてあります。悪を作ったのですから「悪人」と書いてもよさそうですが、ここは「愚人(愚かな人)」と書いてある。つまり、一生懸命生きる中で傷つけ合ったり苦しめ合ったりすることを免れなかった、そういう在り方なのです。お経は非常に厳密だと思います。悪を作ったから「悪人」と言ってもよさそうですが、そういう縁・境遇の中を生きて、そして苦しみを作り続けてきた「愚人」と言っているのです。その人は、命が終わってもその苦しみからは解放されないだろう、とてつもない長い時間をかけて苦しみを受け続けることは終わりがありません。

そのような「愚人」が、初めて仏教のこと、お釈迦様や阿弥陀の世界のことを教える人に出会ったのです。その人のことを「善知識」と言っています。

ところが、念仏させようとするのだけれども、念仏できないのです。まずこの場合の「念仏」は、心を静めて心に仏様の世界・阿弥陀の世界を思い浮かべること、比べなくてもいい世界・量らなくてもいい世界を思い浮かべることです。ところが、今まで作ってきたことになされるような苦しくて仕方がない日々の中で、念仏できないのです。余裕がないのです。

そうしましたら、傍線部分「汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」と「善友」が言います。「善友」は善き友、おそらく善知識が善き友となつてという意味だと思えますが、ここに「称名念仏」ということが言われます。念仏というのは仏に出遇ったところから始まるわけなのですが、その仏を念ずることがなかなか難しい時には口で名前を称えるだけでよいと、阿弥陀の名前を称えてくださいと勧めたと言うのです。心を落ち着ける余裕がな

い時は称える、称名が大事だと言っているのです。

その後の傍線部分「十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ」、十遍ほど南無阿弥陀仏と称えさせたわけですから、今まで作り続けてきたこの罪、それに追いかけられること、うなされること、これらからの解放があると書いてあります。

ただ、この罪から除かれるということが、過去にやったことがきれいさっぱり消えてしまうというふうには聞こえなくてよくないです。これも結論的なことを言っておけば、自分がやったことを本当に受け止めることができるようになるということです。自分は一生懸命生きてきたつもりだったけれども愚かなことになっていた、幸せを求めながら自分で地獄を作っていたという自覚がそこに起こり、罪に追いかけられることから解放されるということです。自分の過去を隠したり、自分の過去を偽ったり、そういうことからの解放という意味で、「罪を除く」を読まなければならぬと思います。

ですから、この人は決して今まで仏教を学んだり修行をしたりしてきた人ではないのです。命が終わる最後の最後に念仏を勧めてくれる方との出遇いがあって、阿弥陀の世界を初めて知り、そこに私は私として命を完結している、人生を尽くしているということが起こると書かれています。阿弥陀さんが目の前に出てきたとか、そんなことまでは書かれていないのです。名前を称えただけです。しかし、名前を称えるところに、「そんな世界があったのか！」という出遇いがあるということを示唆しているわけです。

三 称名念仏の意義

ここを大事になさったのが法然上人であります。法然上人までの間には『観無量寿経』を大切に受け止めたたく

さんの方がおられますが、中国に『観無量寿經』をたいへん重要視なさった善導大師（六一三―六八二）という方がおられて、法然上人はそのお心を受け止めたわけです。法然上人に先立って、日本では源信僧都（九四二―一〇一七）という方も非常に大事な役を担っておられます。そういう先に生きられた方があって、この阿弥陀の世界は法然上人に伝わってくるわけであります。阿弥陀の世界が大事だということをお釈迦様がお勧めになり、善導大師がお勧めになり、源信僧都の書いた書物などを通して法然上人はお釈迦様のお心に出遇っていくことになります。

法然が、称名ということで特に注意するのは、心を集中しないといけないとか、雑念があつてはいけないとか、念仏にはそのようなイメージがあるかもしれませんが、いろいろな思いが湧いていてもいいということです。だいたい「無念無想」ということ自体が、人間には無理難題なことではないでしょうか。「無念無想」ということを目指せば目指すほど、今度はそれに執着するかもしれません。だから、いろいろな雑念があつても構わない。「阿弥陀」という名前を通して阿弥陀の世界をいただいくこと、思い出すことが大事なのだとことです。これが法然の受け止めになります。

法然がかかげた専修念仏（ただ念仏）

法然がお経に遇って称名念仏がいいと選んだのではなくて、阿弥陀仏自身が称名一つでいいことを我々に与えてくださった、残してくださったという、阿弥陀の心を尋ねていくことが『選択本願念仏集』に出てきます。その中の一節だけ、今日は挙げさせていただきました。法然のかかげた「専修念仏」、一般には「ただ念仏」という教えであります。

当に知るべし、上の諸行等を以て本願と為したまわば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多からん。然れ

ば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんが為に、造像・起塔等の諸行を以て、往生の本願と為したまわず、唯称名念仏の一行を以て、其の本願と為したまえり。

〔選撰本願念仏集〕本願章、『真宗聖教全書』一、九四五頁、傍線引用者

「諸行」というのは念仏以外の行です。何か一つ条件をたてれば、できないと言う人が出てくる。それに対して、「称名念仏」というのは一人ももらさない、どこでもできる、どんな状況でも成り立つのです。阿弥陀との出会い、仏の世界との出会いなのです。法然は、これを大事に受け取ったわけです。それを阿弥陀仏自身のお心として、傍線部分「弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんが為に」です。一人残らずすべてのものをおさめとりたい、一人ももらさないという心から選ばれたのが称名です。諸行の代表が挙がっていますが、「造像」というのは仏像を造ることです。「起塔」というのはお堂を建てることです。仏像を作ったり、五重塔を建てたりすることが、仏教界の中でも善根功德として奨励されていたわけでしょう。しかし、法然ははっきり言っています。それは、お金のある人はできるかもしれないけれども、ない人はもれてしまう。仏教というのは、特定の人だけに成り立つものではないのです。

仏教は誰の上にも平等に開かれている、これが、お釈迦様が説こうとした法則です。誰の上にも成り立つ道なのです。それを阿弥陀の名前でお釈迦様は残してくださったわけです。その根本を、法然上人は何か一つの条件づけをすればもれる人が出る、もらさないのでこの称名念仏だという意味で、次の傍線部分「唯称名念仏の一行を以て、其の本願と為したまえり」というふうに断言しました。これは法然が、称名念仏がいいと言って選んだのではなくて、阿弥陀仏自身が選択したのです。「選撰^{せんせん}本願の念仏」なのです。阿弥陀仏の本願において選択された念仏です。「一人ももれない道がある」ということです。これは、お釈迦様が語ろうとしていた根本の心と通じ合っています。

お釈迦様は誰の上にも成り立つ迷いを超える道を説こうとなさった。それが釈尊の出世本懐だというお話をしました。でも受け手側、聞く私たちのほうは「そんなことがあるはずはない」と言うわけです。これは現代でもやっぱり言われます。「誰もが平等に救われるなんて、そんなことはきれいごとだ」と言われる。あるいは「理想かもしれないけれども、そんなことはあり得ない」と言われます。「誰もが平等に救われるなんていうことは甘い」というふうに言われるのです。

しかしながら、仏の世界と我々が日頃生きている物差しで量る人間の世界、これは質が違うのです。質の違う仏の世界に触れたところに物差しから解放されるということは、経歴や能力は関係がないのです。生まれた家柄や性別も関係がないのです。仏教の知識があるかないか、そんなことも関係がない。これを法然は、称名念仏一つで誰もが助かるというかたちでかかげたわけです。誰をも分け隔てすることなく、迷いを超える仏教であります。

ただ、これがまた誤解を招きます。人間というのはいろいろな先人観がありまして、称名念仏となると、「そんな呪文みたいなことを口で言って何になるのだ」とよく言われます。次に訊かれるのが、「何回称えたらいいのですか」、あるいは「声の大きさはどれぐらいですか」、あるいは「お経をちゃんと読んでからの念仏のほうが本当ではないですか」などです。せっかく法然が誰をももらさない道をかかげたのに、そのことが見えなくなっていくということが起こるわけであります。

実際に法然上人という方は、一日に六万回の念仏を欠かさなかったと言います。最晩年には七万回になったと言います。「南無阿弥陀仏」と一秒に一回称えても、七万回というのは二十時間かかります。つまり、ずっと称え通しだったのが法然という人なのです。ただそれは、回数を重ねてこれぐらい称えたら良いことがあるだろうという意味ではありません。法然は阿弥陀の世界をすぐに忘れる「愚かな自分」ということを知っていたから、称え続けな

いといけない自分だということをよく知っていたわけです。阿弥陀の世界を忘れると、人を見てすぐにあの人は敵か味方か、役に立つか立たないかと判断します。でも、阿弥陀の世界を念ずる時に、そういう物差しで量っていることがいかに愚かであったかということに気づかされる。それを忘れない、思い出し続けるのが、「南無阿弥陀仏」と六万回あるいは七万回称えていた法然の姿だったと思います。忘れるからこそその念仏なのです。

ところが法然上人のお弟子の中には、法然上人の七万回にはとても及ばないけれども三万回ぐらいいは頑張ろうという人が出てくるわけです。どういうことが起こるかおわかりですね。三万回頑張っている人は、法然上人には負けるけれども一万回のお前よりは上だと必ずやるでしょうね。これはもはや阿弥陀を念ずることとは無関係であります。口でいくら「南無阿弥陀仏」という音を出していても、阿弥陀の世界を念じているわけではありません。自分を誇っているだけです。

四 呼びかけとしての称名念仏

「南無阿弥陀仏」という、比べなくても良いという世界を聞きながら、比べることに陥っていった。こういう状況を見ていたのが親鸞という人です。法然上人が「称名念仏」をかかげてくださった。これは非常に大事です。どんな者にも道はあるということを教えてくれた。ところが、それがまた人と比べ合う材料になってしまった。親鸞は、そういうところから念仏の意味をもう一遍確かめ直すということをするのです。

諸仏の称名

親鸞は称名念仏を「諸仏の称名」というふうに言います。「諸仏の称名」とは何のことか。称名というのは今まで

お話してきたように、「私」が仏を念ずることです。心を落ち着けられないのだったら口で称えるだけでも良いと、「私」の実践項目とされてきたはずですが。でも「私」ではなくて、たくさんのお様が称えてくださる、阿弥陀を讃めたたえる声だというふうな位置づけ直すのです。次に挙げますのは『教行信証』『行巻』の冒頭であります。

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、即ちこれ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。故に大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。(中略) 諸仏称名の願、『大經』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覺を取らじ、と。已上 また言わく、我、仏道を成るに至りて名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覺を成らじ、と。衆のために宝藏を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん、と。抄要

〔行巻〕、『真宗聖典』一五七頁、傍線引用者

最初の傍線部分「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」、大行というのは、誰が称するとは書いてありません。だから、これは当然私が称えることだというふうな考えても大丈夫なのです。「誰が」と書かない。ここに親鸞の意図が隠れているわけであります。結論的に言う、これは誰が称えてもいいのです。その声が私に届いた時に、「阿弥陀の世界を忘れていたな」という呼びかけとしての意味を持つことが大事なのです。

私も田舎にお寺をお預かりしておりますが、その御同行が、四歳の孫娘さんが「南無阿弥陀仏」と称えたその声がかわいらしかったというお話を同朋会でしてくれたことがありました。ただ同時に、孫娘さんの声を聞いて、私はこんなに素直に念仏をしたことがあるだろうかと思つたと言われました。念のために言いますが、その四歳のお嬢ちゃんが「じいちゃん、どんな思いで念仏していますか？」と吟味したわけではありませんよ。しかし、その

お孫さんの「南無阿弥陀仏」という声がそう聞こえたということは、これは仏からの声として聞こえるということがあるということでもあります。誰が称えても良いと言ったのは、誰かが称える声にハッとさせられるということが起こるということです。

「阿弥陀仏に南無してください」「阿弥陀の世界を大事に生きてください」、こういう呼びかけが「南無阿弥陀仏」であります。それを親鸞聖人は確かめるために、諸仏が名前を称える願として次の傍線部分「設^たい我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨^し嗟^{しゃ}して我が名を称せずは、正覚を取らじ」を『大無量寿経』から引いております。「咨^し嗟^{しゃ}」とは讃^ほめたたえるということです。

これは阿弥陀仏が、仏になる前に、私の名前をたくさんのお子様によって讃^ほめたたえたいと言っているわけです。これは讃^ほめてほしいと言っているのではなくて、讃^ほめたたえるを通して阿弥陀という存在が全世界に届いていくようにということです。阿弥陀という名前を通して、物差しで量る必要のない阿弥陀の世界が迷い苦しむ人の上にはたらいいていくからです。だから「諸仏の称名」、諸仏の称える声というのは阿弥陀の存在を全世界にひろめていくというのはたらしきを持っているということです。そういうふうになりたいと誓っている。これが諸仏によって私の名前が讃^ほめられたいという、この願いの要であります。

親鸞聖人は続けて、次の傍線部分「我、仏道を成るに至りて名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」を引いています。聞こえないところがないようにしたいと言っています。言葉が全世界に届いていく、その言葉がはたらしきを持つという、ここを大事になさるわけです。

法然上人が「称名念仏」をかかげたというのは、「どんな者ももれないよ」「誰も分け隔てないですよ」「誰の上にも成り立つ道がありますよ」ということでした。その中身は、音を出せば何とかしてもらえんという話ではないの

です。新型コロナウイルスのことで言えば、ウイルスが退散するという話ではないのです。そうではなくて、現実に向き合う時に自分の都合の良し悪しだけで見ていたこと、それからの解放があるということなのです。

阿弥陀の救いということは、私の思いはからいからの解放、分別からの解放、こうでなければならぬと決めつけていた執着からの解放というふうに言っていると思います。「南無阿弥陀仏」を称えれば、新型コロナウイルス感染症で問題になっている現実が劇的に好転するという話ではありません。それにどう向き合うかということです。好きか嫌いか、都合が良いか悪いかと言っていたことからの解放があるということなのです。

称名念仏の中に、仏からの呼びかけを聞くところを、親鸞は大事におさえていくことになります。「では初めから名前を聞くと言ったらいいではないか」とおっしゃる方がいるかもしれませんが、それはまた聞いた度合いを比べて、私の方が深いとか言い出す人間がいるものですから、分け隔てのないことを「称名」というかたちであらわしているのです。称名念仏の中身は阿弥陀の世界にうなずくということであるというわけです。諸仏が咨嗟し称する言葉（声）を通して、阿弥陀と出会う。これが、親鸞がこの「大行」を「諸仏の称名」というかたちでおさえることの意味であります。

実際に親鸞も、法然が「阿弥陀の世界は大事だよ」と言ってくれたから、親鸞に先立って阿弥陀の世界に出遇っている人が勧めてくれたから、それを通して阿弥陀に出遇えたわけです。法然もそうでした。善導を通して阿弥陀の世界に出遇っていました。自分に先立って出遇っているという歴史があった、阿弥陀の世界を証明してきた人々がいたということが「諸仏」の具体的な中身であります。

それを通して阿弥陀自身の呼び声を聞くという意味で、もう一つ挙げました。

「南無」の言は帰命なり。（中略）ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり。

これは親鸞の言葉です。「帰命」というのは命令に従う、命令に帰するという意味ですが、これはインドの発音では「ナモ (namo)」です。その「帰命」というのは、「私が帰命します」と言うのに先立って一人ももらさないと誓ってくださっている阿弥陀仏の本願が我々を招いてくださっている、呼んでくださっている、絶対命令だという意味で「勅命」だというふうに書いてあります。「勅命」というのは中国以来、皇帝の命令を意味します。

親鸞は天皇・上皇の命令で流罪にあった人です。「僧侶を辞める」というふうに言われた。しかし親鸞は僧侶の資格はなくなりましたが、仏教徒として生きることはやめませんでした。「私の国を生きていってください」という本願の命令を一番大事なことでして生きていった人が親鸞という人です。勅命という語が用いられているのは、一番大切な命令だということを暗示している言葉かもしれないと私は思っております。

「私が阿弥陀に南無します」という前に、阿弥陀が「我に南無せよ」「私の世界を生きよ」と命令してくださっている、その声を聞くのです。これは諸仏の称名を通して阿弥陀自身の声を聞くという構造であります。阿弥陀自身の招喚の命令を聞くということが「南無阿弥陀仏」ということの中にあるわけです。

「言葉が、なぜそんなことが大事なのか」とたまに訊かれます。以前に、この講堂にお客さんを招待して、「ここが私の大学で一番大事な場所です。講堂と言っていますが、西洋の学校で言えば礼拝堂に当たります」と話をしたら、「前にあるのは何ですか?」と訊かれました。「ご本尊です」というふうに説明しましたけれども、字が書いてあるので、「石に刻んである字が何で大事なのですか?」と言われました。

「南無阿弥陀仏」、これは今ずっとお話してきましたが、「阿弥陀に帰命してください」「阿弥陀の世界を大事に生きてください」という呼びかけの言葉なのです。この言葉を通さないと私たちは、勝ったか負けたか、得か損か、

そういう世界にずっと埋没してしまうという在り方を免れないわけであります。その上で阿弥陀の名を通して、言葉を通して阿弥陀の世界に出遇い続けていく。これが「南無阿弥陀仏」という言葉の意味であり、それを称えることの意義だと申しあげておきたいと思ひます。

五 念仏の利益

仏の呼びかけが開く生き方

その念仏によつて何が与えられるのか。これは伝統的には「念仏の利益」と言うべきかと思ひますが、「仏の呼びかけが開く生き方」とも言えると思ひます。

『教行信証』『行巻』に親鸞がまとめのようについている言葉をいくつか紹介したいと思ひます。

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。

〔行巻〕、『真宗聖典』一九二頁、傍線引用者

念仏によつて、我々は阿弥陀仏の大悲の船に乗ると書いてあります。一人ももらさないということを船にたとえています。どんな者も溺れさせない、海に沈ませないのです。

「光明の広海」というのは、ものが見える世界でしょうね。私たちは日頃見ているつもりで、役に立つか立たないか、敵か味方かと瞬時に判断しています。それは本当には見えていないということになるわけです。本当の存在の意味を照らし出す。これが「光明の広海に浮かぶ」ということです。そこに「至徳の風」が静かに吹いている。「衆禍の波転ず」、これは大事な言葉です。「衆禍」というのはたくさんの禍です。

現在も新型コロナウイルスに対しては「コロナ禍」と言って、「禍」という字が使われています。何気なく使っていますが、そのうちに私たちにとって単なる邪魔者というようなイメージが定着しますよね。もちろんコロナがうれしいとは誰も言いません。しかし、今回の経験を通して見えてきた大事なことがあるとすれば、コロナの問題は単なる邪魔者というわけではないのです。ただ元に戻ればいいというわけではなくて、それを通して新たな生き方がスタートするはずです。コロナを縁として、そこから見えてくることがあれば、「あの経験は大事だったなあ」と言えたら、単なる禍ではないのです。

これが「衆禍の波転ず」です。意味が変わるわけです。親鸞の別の言葉では「悪を転じて徳と成す」とか「悪を転じて善と成す」もあります。「転ずる」というのが念仏の利益です。

そして、仏教で長らく究極の覚りと言われてきた「大般涅槃」が、愚かな凡夫の上にも成り立つということを親鸞は語ります。特別な修行をした者だけでなく、誰の上にも成り立つということを語ります。

最後に、傍線部分「普賢の徳にしたがなり」とあります。「普賢」というのは普賢菩薩という菩薩の名前でありまして、慈悲を代表する、慈悲のはたらきを象徴するお名前です。対になるのが文殊菩薩でして、この方は智慧をあらわします。普賢と文殊は、大乘仏教ではものすごく大事なお名前なのです。

「普賢の徳」は慈悲です。人間の心から出てくるはずのない心だと言ってもいいです。いつも自分がどれだけ得をするかという自分の利害しか考えていない人間が、相手のことや人間以外の一切有情うじようのことに目が向くようになる。そういう世界をいただくのが「念仏の利益」だと言っているわけです。

起こるはずのないようなものの見方、いのちの見方を賜る。これが「念仏の利益」だと言われていると思います。

真の仏弟子

それを親鸞は「真の仏弟子」というかたちで、「信心の利益」として『教行信証』『信卷』に語ります。「信心の利益」と言いますが、念仏を通して阿弥陀に出遇ったところに与えられる利益という意味では、今日は「念仏の利益」の中に入れてお話ししたいと思います。

また、法を聞きてよく忘れず、見て敬い得て大に慶ばば、すなわち我が善き親友なり、と言えりと。

〔信卷〕所引『大無量寿経』、『真宗聖典』二四五頁

これは、お釈迦様が『大無量寿経』の中で語っておられるお言葉であります。仏法を聞いてよく忘れず、仏を見て敬い、それから得たものを大に喜ぶならば、私の善き友であると言っています。私の「弟子」とはおっしゃっていません。「我が善き親友」、釈尊が「友」と呼びかけてくださる。釈尊を、生きていく「友」として歩んでいくということが我々に与えられるのです。

生きる現場はそれぞれ厳しい孤立した状況かもしれませんが、そこにお釈迦様もこうだったとか、親鸞聖人もこうだったとかということを感じることができれば、我々はすでにこの世に存在しない亡き方ともつながっていくことができます。孤軍奮闘しているようでも、支えてくださる力を亡き方からいただくということもあり得ます。

釈尊から「善き友」と呼びかけられる、つまり仏法に生きていく、阿弥陀の世界を生きていくことの大事さ、それをここまで讃めてくださっている言葉であります。

もう一つ、これは『観無量寿経』のお言葉であります。

また言わく、もし念仏する者は、当に知るべし。この人は此人中の分陀利華なり、と。

〔信卷〕所引『観無量寿経』、『真宗聖典』二四六頁

「分陀利華^{ふんだりけ}」というのはインドの「プンダリーカ (pundarika)」という言葉の音写語（音を写した言葉）であります。意味は白い蓮の花、白蓮華のことであります。白い蓮の花というのは、泥の中から咲いてその泥の色に染まらないという意味で、覚りの象徴としてよく使われるのです。大事なものは、泥を大地として咲いていることです。泥を捨ててしまつて、どこか自分だけきれいなところに行くという、そんな花ではありません。ドロドロとした現実の真つただ中で仏法の覚りの花を咲かせる。これが「分陀利華」というふうに言われるのです。

ここでは、念仏する者はまさに「人中^{にんちゆう}の分陀利華」であると言っているわけです。「人中の分陀利華」をいろいろに解釈することができるとはいますが、いろいろな人がいる中で覚りの花を咲かせたすごい人、ともとれないことはないと思います。しかし、教えをいただいて阿弥陀の世界を生きていくという大事なことを輝かせてくださる覚りの花に象徴されます。ただ私は、「人中」というのは咲く場所を言っていると思います。高原のきれいなところで高嶺の花として咲くのではなくて、ドロドロとした現実の真つただ中で咲くわけです。

これを親鸞聖人は、「弥勒に同じ」とまで言い切っています。弥勒菩薩は、お釈迦様が未来の衆生を頼むぞと託していった方です。いろいろな經典の中で、弥勒菩薩がお釈迦様の次に仏になるということが説かれますので、弥勒菩薩があらわれてくれたら、この世の中が良くなるのではないかという弥勒信仰が親鸞の時代にはとても盛んであります。

私は、これは八百年前の話ではないと思います。現代でも問題が入り組んでくると、それをスパッと整理してくれる専門家はいないのかということになる。もっと言えば、世の中を救ってくれる救世主はいないのかということになる。ですから弥勒を待ち望む信仰というのは、一言で言えば「救世主待望論」だと思います。それが悪いとは言いませんが、いつになったらあらわれるのか分からないですね。

厳しい現実がそのままという時に親鸞は、念仏する人は弥陀と同じ、つまり五十六億七千万年の後にあらわれる弥陀の役割が、今念仏しているその人の上にあるのだということを言ってくださる。はつきり言えば「弥陀信仰」との決別であります。

英雄や救世主を待ち望むのではなくて、一人ひとりが弥陀を念じてどう生きるか見定めていく。そこに「分陀利華」が咲くのです。これは、偉い人間になったという話ではありません。自分の思いや分別を中心にすれば、あつという間に好きか嫌い、得か損かということに飲み込まれてしまう。でも弥陀を念ずるその時だけ、その時に弥陀の世界の大事さをいただきながら、この現実の真ただ中で生きていけるということが起こる。こんなふうに申しあげたいわけです。

おわりに

今日の講題「念仏は人間に何を与えるのか」の結論ですが、いよいよ教えを聞いて生きていく人間が誕生すると言いたいと思います。あるいは法然上人のお言葉をとれば、いよいよ念仏して生きる人間が生まれると言いたいと思います。

ある時、「念仏したらどうなりますか」という質問をいただきました。「いよいよ念仏する人間が生まれます」、「いよいよ教えを聞いていく人間が生まれます」と答えましたら、「はあ?」と言われました。劇的に現実が変わるとか、本人が超人になるようなイメージを持つておられる方は「それだけですか?」というふうに言われます。しかし、「それだけですか?」と言われる利益が私はとても大事だと思えます。

一人ひとりが物差しで量れない弥陀の世界を念じて、この世の中の現実と向き合っていく。そこに分陀利華と

いう花にたとえられるような生き方が与えられるわけです。その意味で、「念仏は人間に何を与えるのか」と問われれば、私たちに「生き方」を与えてくださると思えます。どんな生き方かと言えば、かかわりの中で仏の眼、^{まなこ}「普賢の徳」と言われる慈悲の心、それをいただきながら生きていくような人間が生まれたいと思います。

現実から逃げ出すのではなくて、現実の真ただ中で生きていく。生きている現場は一人ひとりバラバラかもしれませんが、決して孤立してはいない。自分に先立って生きられたたくさんの方々の諸仏、阿弥陀の世界を大事に生き、その世界を勧めてこられた方々の生き方を念じながら、その声に励まされながら生きていくということです。たくさんのかかわりをもって生きることが始まるということでもあります。

お約束の時間となりましたので、ここまでしたいと思います。

〔編集委員会付記〕

二〇二一年度大谷学会春季公開講演会では、本学教授一楽真先生の講演の後、作家五木寛之先生に「いまを生きる力」という題にて講演をいただきました。五木先生のご意向により講演録を掲載することは致しませんが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で二年越しの講演会であり、来場いただいた本学会会員の皆様とともに有意義な時間を持つことができました。

今年度の公開講演会は新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下での開催であつたため、やむなく来場者の制限（京都府在住の本学会会員及び大谷大学発行ＩＣカード所持者のみ）を致しました。

